

## ゴリラに肘鉄を食らった話

### ゴリラに肘鉄を食らった話

ゴリラのことは前にもちよつと書いた（『ロマネスク誕生』序章）けれども、それはほんのさわりで、肝心なことはまだどこにも書いていない。たぶん、人にも話したことがない。

大学生の頃、とつぜんゴリラが気になり始めた。ゴリ

ラ全般ではない。ある特定の一匹が、とてつもなく大きな存在になった。

そうなったのには明確なきっかけがある。

たまたま通っていた大学の学生食堂の脇が学バスの発着点になっていて、いつもガラ空きのバスが発車を待っていた。その行先の一つが「上野動物園行き」だったので、授業に出るの嫌だなくと思つた時など、ふらりとバスに乗って動物園に行くのは自然の成り行きでもあった。が、それも特定のゴリラには結びつかない。

当時、上野動物園に見事なゴリラがいた。ブルブルという名前だったと、後で知つた。ブルブルは上野動物園の歴代ゴリラの初代である。しかし、だから尊いわけではない。見るだけでほとんど霊的なものを感じさせる格

## ゴリラに肘鉄を食らった話

別の存在感があっただ。

何よりすばらしいのは、その毛並みの色。煙るような薄紫が角度によって銀色に光る。他には見られない、何とも美しい色合いだった。

大きいことも大きい。他のゴリラの優に二倍はありそうな体躯で、その紫色の巨体を見ると、日常を離れた別次元に浮遊する心持ちになった。

当然、魅了されたのは私ひとりではないはずだが、それはそれとして、私が受けた衝撃はきわめて個人的で、他人と分かち合えるものではない。

ゴリラを見ることができるのは、起伏のある野天の岩山とその背後にある三方がガラス張りの部屋、そのどち

らかだった。間のドアを通じて自由に行き来ができるよ  
うだから、住む身にしてみれば庭とリビングという感じ  
だろうか。

薄紫の大君は室内にひとりでいることが多かった。長  
老には、群れを離れた孤高の風情が似つかわしい。

衝撃的な事件が起きたその日、見物人はたまたま私ひ  
とりだった。学校をさぼる時間だから、さすがに動物園  
に来る人も少ないのだろう。向こうもひとり、こちらも  
ひとり、なんか贅沢な気分だ。

見れば奥の壁際にゆったりと横座りにすわって、床に  
一方の拳を置き、あてどない物思いに耽っているような。  
なぜだか優雅な半跏思惟像を思わせる、すばらしくバラ  
ンスの取れ姿である。

## ゴリラに肘鉄を食らった話

時折、所在なげに見るともなく周りを見回し、膝元のバナナを拾い上げたりしている。ゴリラの手がつまむと、バナナもほんとは小さく見えた。それを目の高さまで持ち上げてしばし見入っていたが、ポイツと脇に投げ捨てた。あーあア、これにも飽きたなあ、そう言っただけ息をついているみたいな仕草だ。

私は思わず大口を開けて笑ってしまった。昭和六十年代のバナナは高級果物、ちよつとした贅沢品だったのだ。庶民がそう毎日食べられる代物ではない。それをいかにも飽き飽きしたという素振りや投げやるのが、もしかしたらちよつぴり羨ましかったのかもしれない。私は取り分けてバナナが好物というわけではないけれども、今よりずっと貧しかった当時の日本人は、あんなに無造作

にバナナをうつちやつたりはしなかった。

ま、それはどうでもいい。私はさほどバナナにこだわっているわけではない。で、他に見物人がいないのを幸い、臆面もない大笑いでご破算にしたつもりだった。

と、やにわに彼が立ち上がったのである。そして真正面から私のほうを向いて、ゆっくり歩き始めた。のっしのっし、と急ぐでもなく巨体が近づいてくる。それはちよつと言葉にならない感じだった。怖いことも怖いのだが、同時に何か魅入られたようでもあって、動きが取れない。

逃げようか、とつさに思ったような気もするけれど、でもどこに向かつて？ それに私の前には強固なガラスの壁がある。私は体を固くしてその場に踏みとどまり、

## ゴリラに肘鉄を食らった話

なすすべもなく近づくとゴリラを見上げていた。それにしても、何と大きな体だ！

ゆっくり時間をかけて私の目の前まで迫って来た彼は、何と！クルリと回って背を向けた。襖一枚分は優にありそうな薄紫色の背中……。その背中をしっかりと見せつけるや、「ン」という半拍ほどの間で両肘を前に引き、その反動で背後のガラス板を「ドン！」と突いたのである。目の前のガラス板が言いようもなく深い、そのくせ軽妙な音を立てて震動した。

私は呆然と立ったままだった。まるで銃弾に撃ち抜かれたように頭の中が真っ白で、何も考えることができない。巨体はそのまま、近づいてきた時と同じ歩調でゆっくりと遠ざかり、元いた場所に戻ると、前と同じ格好で

座り込んだ。そして、そして……。下からすくい上げるような眼で私を見上げた。「ふん、どんなもんだ！」あるいは「まいったか！」そうとでも言いたげな目つきだった。

私は完全にうちのめされて、すごすごと大学に戻った。しかし授業に耳を傾ける余裕はまったくない。頭の中は、いや体全体が、あの衝撃に包まれたままだった。

私は何度もくりかえし、先刻の光景を反芻した。一步、一步と近づいてきた巨体。襖よりも大きく見えたモーヴ色の肉厚な背中。そして何よりも、「クルリ！（ン）ドン！」というあの絶妙な間合い。私は、思い出してはため息をつき、また思い出して頭を振った。

ため息にはこもごも複雑な思いがこもっていたような気がする。ある意味、私は叱られた子どものようにしよ

## ゴリラに肘鉄を食らった話

げていた。ゴリラは私に腹を立てたのにちがいない。そんな気がしていた。バナナをポイツと捨てる仕草をそんなに不作法に笑ったから。人（ゴリラだけど）が鬱な気分でうずくまっているのに、いつまでもしゃあしゃあと眺めていたから。そんな私に腹を立てて、あんな行動に出たのではないか。そうとしか思えなかった。

それにしても、あの「クルリ！（ン）ドン！」の、何と  
いう間合いの良さ。微妙に心をくすぐるニュアンスがあって、しかも、ここ！という究極の瞬間を毫も外さない。巨体が演じた、ことばにならないほどの確で、魅力的な動きだった。

人間はかなり優秀なミュージシャンでも、あるいは天才的なダンサーでも、あれほど絶妙なリズム感を持って

いる人は、そうはいないだろう。いや、絶対に！いない。というのも、純粹にリズムの問題だけでなく、身体全体のポリウムや重量感がリズムを増幅して、じつに何とも、ふしぎな求心力のある空気感がそこに醸成されていたからだ。

のっし、のっしと歩き始めたそのテンポにいつのまにか乗せられて、究極の「クルリ！（ン）ドン！」の時点で、私はまるで厚い透明の膜にすっぽり包まれたようになって、内部の気体とも液体ともつかぬものの微細な振動にただただ無心に揺すぶられるままだった。

ブルブルというそのゴリラにはその後も何度か会いに行ったが、しかし同じことは二度と起こらなかった。物

## ゴリラに肘鉄を食らった話

憂げに横座りして奥さん（？）や子どもたちのほうを見やっていたり、奥の壁に向かって座ったきり動こうとせず、ただ丸めた大きな背中を見せつけているだけのこともあった。

そんなことが重なるうちに、私は自分の見たものが信じられないような、本当のことだったか疑わしいような気持ちになりかけたこともあった。しかし、あの「クリリ！（ン）ドン！」の印象だけはふしぎに薄れることがなく、私はその後も数え切れないほど何遍も頭で再生しては衝撃を確かめた。今もまだ、その感覚は鮮明に私の中ににある。

\* \* \*

そういえば、ゴリラでびっくりさせられたことが、もう一つあった。

同じ動物園だが、私はガラス張りのリビングルームの向こう側、野天の岩山の前に立っていた。おとなや子どもや、たくさんのゴリラたちがくつろいでいるのを、こちらもおとなや子ども、おおぜいのヒトががやがやと楽しそうに眺めている。休日だったのかもしれない。

時折ヒョッコ、ヒョッコと弾むように動く若い牡（たぶん…）もいるが、多くはドテンと横座りして陽射しを浴びている。ゴリラというのは、猿の仲間のなかでも、さほどかいがいしく動き回るほうではない。まあ、あの図体もあるし、狭い場所に閉じ込められているというい

## ゴリラに肘鉄を食らった話

生活条件もあるだろう。たとえばヒトが動物園の一区画で長く暮らすことになったら、どのくらい動くものだろうか。

ついそんなことを考えてしまう、のどかな時間だった。と突然、右手前にいた一頭の若ゴリラが立ち上がった。走り出した。岩山の縁に沿って、ということは見物人の最前列のきりきり間際を疾走して、左手のほぼ突き当たりでストーン！と腰を下ろした。

驚いたのは猛スピードで走ったからではない。それもびっくりだが、走りながら「バン！バン！バン！バン！バン！バン！」と、ものすごく大きな音を立てたのだ。胸を強烈に連打して出す、大きなドラムを叩くような、激しく響き渡る音である。

後に知ったことだが、これはその名もドラミングといって、ゴリラ特有の習性、というか奇癖らしい。知っていればそれほど驚くこともなかったのかもしれないが、知らなかった私は文字どおり、びっくり仰天してしまった。

驚いたのは私だけではない。並み居るおおぜいの見物が「おお、おおーッ」と地鳴りのような大歓声を上げたから、知っていてもなおびっくりせずにはいられない代物であることは確かだ。

たとえばバレエの舞台上でスターダンサーのジャンプとかピルエットなど、知っていてもその度に全身を揺すぶられるような感動を覚えることがあるが、それとどこか通じるものがあって、ゴリラのドラミングには、たとえ

## ゴリラに肘鉄を食らった話

知識として知っていても、その瞬間にはやはり驚かずに  
いられない、そんな迫力がある。

しかし、それをやってのけた当のゴリラは、何食わぬ  
顔でそっぽを向いている。それがまた言うに言われぬ余  
韻なのである。スターダンサーなら、観客に向かって両  
手を広げ、誇らしげに深々と辞儀をするだろうし、場合  
によっては、もう一度やって見せるかもしれない。しか  
しゴリラは違う。知らくん顔をしているのだ。見ている  
こちらは、胸がもやもやしてしまう。

で…、勢いで、またよけいなことを考えてしまった。

あの音はいったい何なのか。バン！バン！とも、グ  
ン！グン！とも、文字では書きようのない爽快で迫力の  
ある音。まさに大型のドラムを叩く音だ。それを激しく

連続する。

しかし、空洞に革を張ったドラムならばともかく、生  
きている動物の胸がどうしてあの音を発することができ  
るのだろうか。生き物の体には内臓が詰まっているはず。  
内臓ははらわたと言うから、あまり想像したくないけれ  
ど、かなり湿っていて、ふわふわ、グチャグチャしてい  
るにちがいない。湿った布団なんか叩いても、音など出  
るものではない。試しに自分の胸を叩いて見ても（私も  
じっさい、やってみた）、またはそこらにいるゴリラに似  
た太ったおじさんの腹を叩いてみても、音が出るとはと  
うてい思えない。

どうしてゴリラの胸はあのように晴れやかで強烈な音  
を響かせることができるのか。いくら考えても解けない

## ゴリラに肘鉄を食らった話

疑問であった。

ちなみに、ドラミングとは動物が声以外の手段で派手な音を出すのを言うようで、他にはキツツキが木の幹を突く（ゆえに木突キツツキ）音とか、鳥が翼の羽音を立てるなどの例があるらしい。

キツツキのドラミングは理解できる。ドラムに似た音かどうかは別として、堅い物と堅い物を打ち合わせれば、乾いた音が出る。木だって木魚もくぎよのように良い音がする。鳥の羽音も分かる。しかし、ゴリラの胸から発するドラミングは…、うーん、いくら考えてもふしぎなのだ。

分からないことは長年たっても分からないままだが、考え続けるうちに、何となし、ゴリラについてある思いが形を成した。それは…、

ゴリラは天性のパフォーマーなのではないか。要するに、人を驚嘆させるのが好き。アツと言わせたいのだ。ここぞという瞬間を見逃さず、まわりの状況や自身の図体なども巧妙に、でもまったく本能的に計算して、見る者を仰天させる瞬発芸を、生まれながらにして持っている。すべてのゴリラがその才能を持っているかどうかは知らないが、少なくとも選ばれたゴリラは持っている。そして…、やるのだ。

ゴリラのパフォーマンスについて深く感じるのは、見る者に確実な衝撃を与えるべく、時と状況を見計らっているフシのあることだ。今なら相手は必ずびっくりするぞと、彼らはちゃんと知っていて、やるのである。見な

## ゴリラに肘鉄を食らった話

いようで、じつによく見ている。場を選んでいるとさえ言っている。ゴリラの行動についてさほど詳しいわけではないけれど、数少ない経験からも、彼らのヒトを見る目、状況の判断はヒト並優れていると思わずにはいられない。

だとすると…、あの薄紫の君の肘鉄も、このヒトなら、この微妙なニュアンスや卓抜なりズム感に感応するはずだと、計算済みのことであつたのかもしれない。単純な私はただ無神経な見物態度を（しかし、ふつう動物園でそれが問題になるか？）一喝されたように思つて、単純にしよげたのだった。

ともあれ、嫌われたと思つて始めはちよつと悲しかつたけれど、じつはびっくりさせてやろうという悪戯心に

まんまと乗せられて、一生びっくりしていたのだとすれば、私の心も幾分か晴れようというもの。

それに、もしこのヒトと見定めて秘中の芸をしたのであれば…、あの「クルリ！（ン）ドン！」は、確かにとても私好みの、心憎い技であつた。

さればこそ、私はあの絶妙な間合いと、それに続いたまなざしを忘れられず、今も心揺すぶられつづけている。

（初出 ホームページ「佐々木涼子の部屋」二〇一六年八月）